

『宗鏡錄』の引用諸文献

——『肇論』とその注釈書類について——

仙 石 景 章

延寿の思想の特色は、『宗鏡錄』『万善同帰集』などから教
禪一致、禪淨双修にあるといわれてきた。殊に『宗鏡錄』百
卷については、延寿の言葉のままに、大小乗の經論六十部、

インド中国の聖賢の語三百を集めて方法唯心の宗旨を証明し
たものと概括されてきた。『宗鏡錄』には天台、華嚴、唯識、
禪を中心に儒仏道三教に互る多様な文献が引用され、また逸
書も多数含まれているのは周知のことである。なかには偽撰
とされるものも無批判に採用されている場合があり、延寿の
鑑識眼に疑問がないわけではないが、それを考慮してもなお
『宗鏡錄』の引用文献を調査することは、延寿の仏教學を判
断するのに幾分の意義を有するものと考ええる。

そこで本論では『肇論』とその注釈書類について調査した
ところを述べてみたい。

『肇論』は、陳の慧達の『肇論疏』¹⁾をはじめ数多の注釈書
が著わされ、また三論の吉蔵は著者の僧肇を高く評価し、華

嚴の澄観も自著の中にしばしば引用するほど、時代を超え宗
派を超えて大きな影響を与えた書物である。延寿もまたこの
いわば通仏教的な文献を頻繁に用いる。

『宗鏡錄』には、『肇論』が四十一回、『注維摩經』が八
回、『宝蔵論』が二十三回引用される。²⁾ただし『肇論』の引
用のうち五例については、『華嚴随疏演義鈔』あるいは『肇
論鈔』引用の本文が転載されたものと認められる。また『宝
蔵論』については、僧肇の真撰ではないとされるが、延寿は
これをも彼の著作として引用する。

『肇論』は「宗本義」「物不遷論」「不真空論」「般若無
知論」「涅槃無名論」から成るが、その引用箇所は次のよう
である。(一)内に『宗鏡錄』の卷数と大正蔵の所在を示す。

(一)「宗本義」(卷八、四五八中。卷三六、六三〇中)

(二)「物不遷論」(卷六、四五〇下。卷七、四五三上。卷七、四五
一中、四五一下。卷三三、六〇六上、六〇六中、六〇七上。卷

三四、六一上

(三)「不真空論」(卷八、四五八中〈肇論鈔〉四五九上。卷二二、五三三中〈演義鈔卷一、T三六、七下参照〉。卷二四、五五三上。卷九一、九一二中)

(四)「般若無知論」(卷六、四四九上、卷二二、五三五下。卷二三、五四二中。卷三六、六二七下〜六二九上。六三〇中、六三〇下。卷六五、七八一上。卷七七、八四四上。卷九二、九一二下)

(五)「劉遺民書問附」(卷二二、五三三下)

(六)「答劉遺民書」(卷三六、六三〇中。卷六五、七八〇中)

(七)「涅槃無名論」(卷八、四五九中〈肇論鈔〉卷一四、四九三上〈演義鈔卷八〇、六二八上〉。卷二二、五三五下〜五三六上、五三六上。卷二三、五四二下。卷二九、五八四上。卷四一、六五七中。卷八六、八八七下。卷八九、九〇〇下、九〇五上〈演義鈔卷八〇、六三〇中参照〉、九〇五上。卷九一、九一二上、中。卷九二、九一四下〜九一五上。卷九四、九二七下)

以上のように、かなりの頻度で随處に引用されているが、例えば、卷三十六には「般若無知論」がほぼ全文に互って引用され、なお且つその文々句々に対して延寿が注釈している。延寿の『肇論』に対する解釈法を伺う好例と思われるので、その内容を概説する。

釈して曰く、般若無知とは、是れ一論の宏綱、乃ち宗鏡の大体なり。微妙にして難解なり。所以に全く引いて証明す。

といって、「般若無知論」の「放光云、般若無所有相無生滅

相云々」以下の文を引き、論文を解釈する。延寿は、般若無知を体と用とに分別する。

夫れ般若とは是れ智の用、無知とは是れ智の体なり。用は体を離れず、知は即ち無知なり。体は用を離れず、無知は即ち知なり。

といって、般若(知)無知を智の体と用とに分別ししかも体用は不離であるから、知(般若)と無知とは相即すると解する。また智のはたらきを理事無礙の思想によって解釈する。

要を以て之れを言わば、但だ是れ理事無礙にして、即ち非ず離に非ず。

といい、『肇論』の「神、無慮なるが故に能く独り世表に王たり。智、無知なるが故に能く玄かに事外を照す。智、事外と雖も未だ始めより事無きにあらず。神、世表と雖も終日域中にあり。」という論文について般若の智は事外の理を照らすものであるが、理は事を離れてあるものではないと解し、是れを以て理は事に従って顯われ、理は事に徹す。事は理に因りて成じ、事は理に徹す。理事交わり徹し、般若方に円かなり。

という。因みに『万善同帰集』卷上の〈理事無礙門〉には、「事はもと理に因って立つものであるから、理を離れば事を成ずることができず、理は事に因って彰われるものであるから、事を離れば理を彰わすことができない。理と事とは、水と波の如き関係にある、」と説く。この理事無礙の考え方は、『万善同帰集』の十門の冒頭に説かれる延寿の修行観

の立脚地であり、彼の思想を構成する基本要素ともいえるものである。

最後に、「般若無知論」の大意を総括して次のようにいう。般若無知とは、但だ是れ無心、自然の靈鑑なり。相を待て顯われに非ず、縁を俟りて生ずる靡し。有無に住せず、能所に涉らず、非一非異にして而も其の妙道を成ずるなり。

この後段に『肇論鈔』を引用して、「般若無知」に対する解釈を進めるが『鈔』については後に述べる。

こうした延寿の解釈法は、後世の『肇論』の理解に少なからぬ影響を与えている。

例えば、巻七において「物不遷論」の「夫れ人の所謂る動とは昔の物、今に至らざるを以て、故に動にして靜に非ずと曰う。云々」という往物、今物、古今等の諸法の不遷なることを説いた論文を解釈するが、元の文才の『肇論新疏』巻上には、「以前に何度もこの箇處を読んだが、理解することができなかった。しかし永明大師の宗鏡錄を読んで疑問が一遍に解消した。」⁽¹⁾と述べている。文才は、南宋理宗の淳祐元年（一二四一）から元成宗の大徳六年（一三〇二）までの人で、華嚴と僧肇の思想との融合を計ったとされる。『肇論』を理解する上で、延寿の『宗鏡錄』の所説は、彼にとって欠くべからざるものであったかのようにである。

次に『肇論』の注釈書類について述べる。確認できたの

は、次の三書である。

- (一) 元康『肇論疏』（卷二二、五三五下へ卷中、T四五、一六八下）
- (二) 『肇論注』（卷一〇〇、九五三中）
- (三) 『肇論鈔』（卷八、四五九上。卷三三、六〇六上。卷三六、六二九下へ六三〇中。卷七七、八四二中）

先ず『肇論疏』は、唐の元康によって作られたもので、陳の慧達『肇論疏』に次いで古いものである。卷二二、卷三三に引用され、論本文の補足説明に援用されている。延寿が『肇論』を読解するための第一の参考としたもののようである。

次に卷一〇〇に引用される『肇論注』は、現存の藏經には収められておらず、作者不詳である。ただ『義天錄』には、光瑤注、瑤等注、好直注の三種の『肇論注』が記録されているので、このいづれかに該当するかもしれないが、断定はできない。

最後に『肇論鈔』は、卷八、卷七七に引用される。また卷三三、卷三六に「鈔」とあるものも、『肇論鈔』を指すと思われる。この書もまた現存しない。ただ円仁の『入唐求法目錄』や『東域伝灯目錄』などには、牛頭山幽西（棲）寺慧証の著わした『肇論鈔』の書名が見える。また宗の華嚴学者浄源（一〇一一—一〇八八）の『肇論集解令模鈔』に「幽棲鈔」

とあるのはこの慧証の『肇論鈔』をいったものとされる。現時点において慧証の『肇論鈔』と『宗鏡錄』所引のものとの異同を明確することはできない。今は、卷八、卷三六に引用されるものによって、その内容を紹介するにとどめる。

卷八には次のようにいう。

今、論文に就いて総じて四意有り。以て周円の旨を顕わす。

『肇論』を空、仮、亦空亦仮、非空非仮の四句分別によって釈し、全篇がすべて中道の意を顕わしているといい、これを周円という。そして四論を初に境、二に智、三に果、四に境智果に約して、この周円の旨を明らかにする。

然るに四論に皆な周円有り。今、既に一一之れを弁ずるに且く四義に約す。

といって、「不真空論」によって境の周円を、「般若無知論」によって智の周円を、「涅槃無名論」によって果の周円を証明し、境智果の三に約して、前の諸論文を総収する。初の「不真空論」の釈についてみれば、論文の「即物順通故物莫之逆」は、空を顕わして凡夫の執着を遣い、「即偽即真故性莫之易」は仮を顕わして声聞の執着を遣い、「性莫之易故雖無而有、物莫之逆故雖有而無」は、亦空亦仮を顕わして菩薩の境を弁じ、「雖有而無、所謂非有、雖無而有、所謂非無」は亦空亦仮を破して菩薩の執着を遣い、中道第一空、仏の境を顕わす。これが境の周円である、という。「般若無知論」

以下も同様の解釈法であり、ここには省略する。

卷八の『肇論鈔』の引文が、いわば『肇論』解釈の総論を述べたものとすれば、卷三十六の「鈔」は、般若の無知に対する詳釈といえる。その内容は、四句分別を仮りて般若の無知に対する四種の邪見を批判し、無知の真意を明らかにする。四種の邪見とは、有知に執するを常見とし、無知に執するを断見とし、有知でもあり無知でもあると考えるを相違見とし、有知でもなく無知でもないと考えるを戲論見とする。これらの邪見を、「般若無知論」の論文に照らして一ひとつ論破していくのである。

延寿は、『肇論』四論の中、特に「般若無知論」に注目した。そのことは「般若無知は是れ一論の宏綱、宗鏡の大体」という言葉によって推察される。前述したように延寿は、般若の智を理事無礙の立場から解釈し、「般若無知」とは、有無に住せず能所に涉らない無心に他ならないといい、自然の靈感という語で言表した。そして今また『鈔』の四区分別を承けて、「聖心能く四句を亡じ、諸の現量を離る。謂つべし、無知は言偏にして理円かなり。故に無知と云うなり。」といい、四句百非を絶したところに真無知は顕わると結んでいる。

延寿の『肇論』引用の姿勢についていえば、彼にとって、

『宗鏡錄』の引用諸文献（仙石）

円頓門たる「宗鏡」は般若無知によって無辺に照らされている世界であり、その証明として「般若無知論」が積極的に活用された。そして「宗鏡の大体」とまでいわしめた般若無知の解釈に対する彼の自信は、玄覚の知の解釈に対する批判へと向う。延寿は玄覚について、「彼れは但だ無縁の真智を顧わし、以て真の道と為す。……未だ智慧の心源を照了することあらず。」という。しかしこの勝敗は、後に洪覺範の『林間録』巻下において、「智覚意偈に言を兼ねて、悟を明さんと欲す。永嘉は止だ悟の後の病を説く、二老の言は皆是なり。」との判定を受けた。

また延寿は、元康の『肇論疏』をはじめ『肇論注』『肇論鈔』等の注釈書類を援用して『肇論』本文を解釈しているが、彼の解釈法が、文才の『肇論新疏』の例の通り、後代に継承されていった点も見逃せない。

- 1 『慧達疏』を、「慧達序」を著した慧達のもと認められな
いとする説がある。中嶋隆蔵『六朝思想の研究』平楽寺書店、
一九八五年、五一―五二頁参照。

- 2 中田源次郎『肇論及びその註疏に就いて』（『東方学報』東京
第六号、昭和十一年、三五―五五頁）参照。

- 3 『注維摩經』（大正蔵三八卷）の引用箇所。（巻一五、四九四
下。巻二一、五三二中。巻二七、五六八中。巻二九、五八六。
巻三二、五九九下。巻三七、六三七上。巻六六、七八六上。巻
九〇、九〇九中）

『宝蔵論』（大正蔵四五卷）の引用箇所。（巻五、四三九上へ肇

法師。四三九上、下。四四四中。巻六、四四九中。巻八、四
五八中。巻九、四六一下。巻一四、四九〇下。巻一五、四九四
中。巻一七、五〇五中。巻二三、五四三下。巻三四、六一二
中、六一五中。巻三七、六三七上。巻三九、六四九下。巻四
五、六八〇中。巻五八、七四八下。巻六一、七六四上。巻七
四、八二七中。巻七九、八五四上。巻八〇、八六〇上へ肇論。
巻九二、九一五中。巻九六、九三六中。巻九九、九四八中へ
下、九五一下へ宝蔵論注）

- 4 大正蔵四八巻九八八頁中段。

- 5 大正蔵四五巻二〇五頁上段。

- 6 『仏祖歴代通載』二二巻（大正蔵四九巻七二五頁中段）

- 7 『新編諸宗教蔵総録』巻三（大正蔵五五巻一一七七頁中段）

- 8 中田前掲論文参照

- 9 大正蔵四八巻六三一頁上段。

- 10 『国訳禅宗叢書』第一輯第二巻、第一書房、昭和四九年、一
三頁。

△キーワード△ 『宗鏡錄』、『肇論』、『肇論鈔』、般若無知

（駒沢大学非常勤講師）

新刊紹介

仏教思想研究会編

『仏教思想 10 死』

A5版・五四六頁・定価五九〇〇円
平楽寺書店・昭和六十三年九月一日刊